

濱田耕作の「二子山文化」と 末永雅雄の「二上山文化」

— 二上山の「二子石」「Futagonite」「讃岐石」「Sanukite」 —

山 口 卓 也

1. 濱田耕作の「二子山文化」

1930（昭和5）年12月7日、本山彦一大阪毎日新聞社長が故神田孝平男爵蒐集資料を譲り受け、大阪府堺市濱寺にあった本山邸で、喜田貞吉、清野謙次、末永雅雄ら考古学研究者が参集した展観が催された（末永 1986 p 73）。

京都帝国大学考古学教室の濱田耕作教授（1881～1938）は、展観のあいさつで

「本山翁の蒐集品といひ、神田男の舊藏品といひ、之を手にとってみると、確に我が考古學發展史を見る感がある。殊に河内、和泉附近は、奈良朝、飛鳥時代文化の根柢である二子山文化の發祥地である。此の地に住まれる本山翁が、故神田男の舊藏品を手に入れられ、その他の出土品と共に我々の研究に資して戴くことは我國考古学界のため慶賀に堪へぬ次第である」と述べた（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 546）。濱田教授は大阪府和泉岸和田出身で、本山邸のある堺市濱寺の近隣であったので、ことさら河内和泉の地名を強調している。

筆者は、関西大学博物館蔵本山コレクションの由来を検討した際（関西大学博物館 2011）、この濱田教授のあいさつに、「二子山文化」という言葉があることに気がついた。耳慣れない言葉であったので考古学歴史学での記述を探索したところ、同年の濱田教授の講演記録「考古学上より見たる大和」（濱田 1930）に、二上山から石器石材が出て、これが安山岩（アンデザイト）の一種である「サヌカイト」（讃岐石）または「フタゴナイト」（二子石）であり、近畿圏で広く使用されたとあるのを見つけた。濱田教授の「二子山文化」は、「近畿地方の石器時代二上山産出サヌカイト石材の石器文化」であり、さらにその「サヌカイト」の別名として「フタゴナイト」（二子石）があることを理解した。

「二子山」という山名は、二上山に添えて大坂名所図會（秋里籬 著）、丹羽桃溪画1801）に記されていて、現在の二上山の別称であることがわかるが、現在の地図表記や地名には残存しない。近畿地方の石器時代考古学でも、「二子石」「フタゴナイト」「Futagonite」「二子山文化」を使用する研究者は管見の限りではない。

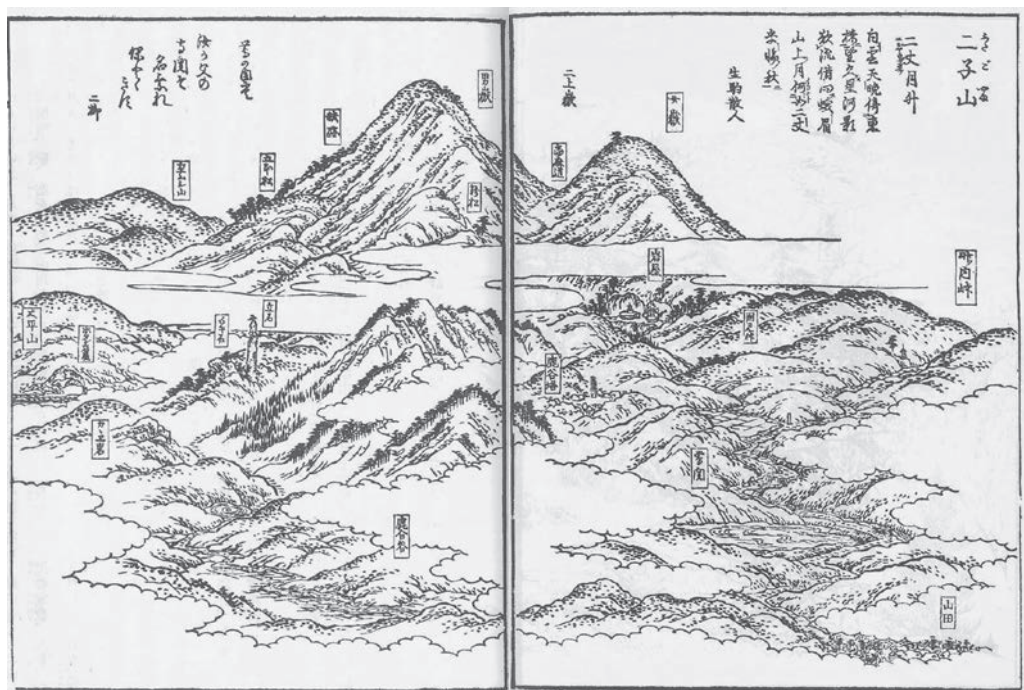
一方、近畿地方の旧石器・縄文・弥生時代、打製石器の石材として主に利用された「サヌカイト」は、「黒色」「ガラス（玻璃）質」「無斑晶」な安山岩（デイサイト含む）である。瀬戸内火山岩区の二上山産出であることを前提に、同種岩石も讃岐産に合わせて「サヌカイト」と経験的に呼びならわしてきている。あくまで、考古学が学史の中で石材を識別認識した時に、地質学岩石

学から取り入れた名称であるが、地質学岩石学分野のアップデートに追従していないので、古くなった名称や区分、概念が取り入れられていて、研究上の齟齬も今や生じるようになっている。また、支配的石材であることから、経験的に死角になっている問題もあるのではなかろうか。

本稿では、「サヌカイト」という岩石名が、二上山産同種石材も含めて使われるようになった経緯、濱田耕作京都帝国大学教授の「二子山文化」「二子石」「Futagonite」、さらには末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所所長・関西大学名誉教授（1897～1991）の「二上山文化」、「サヌカイト」という石材名称をめぐる顛末をみてみたい。

濱田耕作1930「考古学上より見たる大和」（一部抜粋）『奈良文化論叢』第一編

南河内では此の国府を以て代表的の「ステーション」と致して差支へはありませぬ。処が何故に此の地——若しくは地方が斯く主要なる石器時代の遺跡を遺すに至つたかと申しますと、其の理由の一は、実は此の遺跡の東方一里半許り、丁度大和との国境、かの大来《おほく》皇女が「二上山を妹（弟？）背と我が見む」（万葉、二）などと歌はれた大津皇子の御墓のある二上山から、石器の材料として近畿地方に広く使用せられてゐる安山岩《アンデサイト》の一種「サヌカイト」（讃岐石）若しくは「フタゴナイト」（二子石）など今日の鉄にも相当する適当な原料が産出せられる為であります。そこで此の手近な原料を取り来つて、こゝに石器の大なる製造所が発達し、また其の原料の俵地方へ移出する市場が現出したと考へられるのであります。



第1図 秋里籬著・丹羽桃溪画1801『大坂名所図會』 二子山 二上嶽

2. 濱田耕作教授の讃岐石 (Sanukite) と二子石 (Futagonite)

濱田教授は、石器石材産地として二上山産出のガラス（玻璃）質安山岩「サヌカイト」に注目した最初の考古学者である。第三高等学校在学中の1900（明治33）年、国府遺跡などの河内周辺の遺跡の石器が粘板岩（山崎 1889）ではなく火成岩であることに着目して、松島鉦四郎第三高等学校教授から地質学岩石学の研究を取り入れ、讃岐石（Sanukite）と同等の石材が二上山でも産し、国府遺跡で石器石材となっていることを報告した（濱田 1900）。

京都帝国大学文科大学考古学講座教授に赴任した後、1917（大正6）年、「大形粗石器」と旧石器在否問題を契機とした河内国府遺跡の調査では、京都帝国大学の小川琢治教授から地質学岩石学の専門知識を仰ぎ、二上山産玻璃質安山岩が讃岐産とほぼ同性質ではあるが「二子石（Futagonite）」と命名する地質学岩石学研究者がいるとの示唆から、二上山産出ガラス（玻璃）質安山岩に「二子石」（Futagonite）という名称を付すべきという提言を、自らの調査報告書で発表した（濱田 1918）。

その結果、「讃岐」を冠せず近畿地方における石器時代の石器生産の姿をより鮮明に顕在化させることに成功する。石器生産と流通、分布範囲を根拠として、自らの考古学的次元での「文化」に「二子山文化」という命名を与えることになったのだろう。あえて地名として一般的な「二上山」という山名と、近畿地方から離れた地域名が取り込まれた「讃岐石（Sanukite）」を使用しなかったことを注目したい。

筆者は、学生時代（1976年）に濱田教授の国府遺跡発掘報告書を初見した際、「二子石（Futagonite）」は、「二上山の石という別表記」（Futag (ami) onite）で、近畿地方石器石材「サヌカイト」のことであると短絡的に読み替えていて、すぐには「二子山文化」と結びつかなかったことを告白しておく。

国府遺跡報告書の註（4）は、考古学的一般岩石名称として「玻璃質安山岩」を提案し、考古学的石材産出地が限定できる場合には「讃岐石」や「二子石」とすることを可とする。又はこれを一般名称に付して「讃岐（産出）+ 玻璃質安山岩」などとすることを示唆する。この濱田教授の考古学的岩石命名法は、生物学における属名と種小名を続ける「リンネ二命名方式」に類似するものとみなせる。

この当時、地質学岩石学は、岩石学的大別を前提に基準サンプルが採取された場所を尊重する「富士石」「御影石」などの一命名表記が主流であった。濱田教授の考古学的石材名称命名法の先進性は際立っていて、現在も考古学で「御影石」「鉄平石」「サヌカイト」などと記述して、一般名称「カリ長石花崗岩」「安山岩」や「ガラス質安山岩」を省略して運用することが多いが、濱田教授の方法を念頭において記述すれば、のちに同類石材の産地が新発見されても、混乱が避けられると見込まれていたのだろう。

濱田教授は1922（大正11）年の著書『通論考古学』で、「自己の臆説による時代・民族等の意義を包む名称を付するを避くべし。ただそのものの性状を表示し、もしくは最初に発見せられたる地名等を冠するを以て最も適当なり」（第2編第1章18「遺物・遺跡の名称」）とし、命名による概念の混乱をさけようとした（濱田 1922）。さらに、特定石材の石器が分布する範囲は、先史時

代人の移動や交易を示すものとして注目し、考古学として地質学岩石学上の知識が必要であることを言明（第1編第3章13「地質学」）している。考古学本来の学理として、他の科学分野の知見を考古学的上位概念まで構築する姿勢を説いている。

この事例は、地質学岩石学の命名による岩石名が、石器素材の由来の明示につながり、さらには考古学的現象の解釈としての「文化名」にまで昇華するという濱田教授の典型的な道筋が示されているといえよう。

1930（昭和5）年の本山への祝辞や講演での「Futagonite」「二子石」「二子山文化」の言及は、濱田教授の考古学研究への姿勢を如実に表している。



第2図 濱田耕作
京都帝国大学教授



第3図 通論考古学
（濱田 1922）

濱田耕作1900「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」『東京人類学会雑誌』第15巻第174号 p 482

序なれば一言せむ従来此の地の石器の石質は粘板岩なりと記され余りしか信ぜしがつらつら精査するに粘板岩にはあらずして火山岩の一種なるが如し、我が校の松島教授に質せしに安山岩か又讃岐石 Sanukite なるべしと云はれき。但し顕微鏡の検査を経て後断定する所あるべし、もし讃岐岩ならば地質学上讃岐地方にて発見さるるものにしてこの邊にては珍しきものにあらざと云ふ、大和河内の国境二上山の邊には安山岩があれば其れなるやも知れず、而して此の岩石も矢張り此の山の麓あたりより出づ此の地方にては俗に金石といふ蓋し其の音金の如きを以てなり建築等に用衣いる、讃岐にては讃岐石をチンチン石とかカンカン石とか称するとぞ。

・・・山城和泉地方にては此の岩石の産地なし似て交易の模様など考ふ可き也。

・・・尚委しく此の洪積層の端に接して探索せば遺跡遺物を発見する事あらむ。

濱田耕作1918『京都帝国大学文学部考古学研究報告第2冊 河内国府石器時代遺跡発掘報告』第3章第1節 p 14 9行目から12行目 旧字を改める

此等石鏃等打製石器は一切黒色の玻璃質安山岩（二子石）を用ひ毫も他石と交へざりは國府遺跡をはじめ近畿諸地に於いて普通に見る所の現象なり。其の原石は恐らくは國府の東方約二里なる二子（ふたご）山方面より採集せしなる可く、土俗之を金石（かないし）と称す蓋し打てば其響金属の如きを以てなり（4）。

【註】

（1）磨製石斧の従来此の地にて発見せられたるもの数者を聞く。其の石質は何れも二子石以外の石を以て造り、蛤刃のものなり。・・・

（4）此の石器の材料に就きては、従来粘板岩と称せられしも、余輩は明治32年「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」に於いて、理学士松島鉦四郎君の鑑定に本き、之を讃岐石（Sanukite）となせり。更に之を理学博士小川琢治君に質すに、玻璃質安山岩にして讃岐石とは殆ど同性質のものなるも、二子山より出るを以て二子石（Futagonite）と命名せる学者ありと云ふ。されは一般的には玻璃質安山岩と称し、特に國府石器の如く、二子山より原石を採り来れることを想定し得るものに就きては、之を「二子石」と称するを可とす。

濱田耕作1922『通論考古学』第1章第2編18「遺物・遺跡の名称」

新たに発見せられ、もしくは注意に上るに至りし遺物・遺跡に対しては、考古学者はこれに適当なる名称を付するの必要あり。この際学者はすべからく自己の臆説による時代・民族等の意義を包む名称を付するを避くべし。ただそのものの性状を表示し、もしくは最初に発見せられたる地名等を冠するを以て最も適当なりとす。なぜなれば自己の学説は将来の研究により動揺すべきことを予想するは、ひとり謙譲なる態度たるのみならず、過去学界の歴史はこれを証明して余りあり。されば学説の変動するごとに、名称を変更するの不都合を避くるために、あらかじめ学説と関係なき名称を付すべきなり。しかるにわが国においては由来・文字・名称の末に関する議論多く、学者好んで自己の学説による新名称を冠せんとする積あるは深く加しむべしとなす。

しかれども名称の混乱はなほだしきか、あるいは適当なる機会あるに際して、学者の一堂に会合して、前記のごとき主義の下に、名称の協定を試むることは、吾人これを歓迎す。これひとえに名称の統一に利あるのみならず、学者の協力・親和を将来すべければなり。ただかくのごとき機会あるまでは、努めて旧称呼を用いて、自己の見解は、ただこれをその注解として付するにとどめんことを希望してやまず。

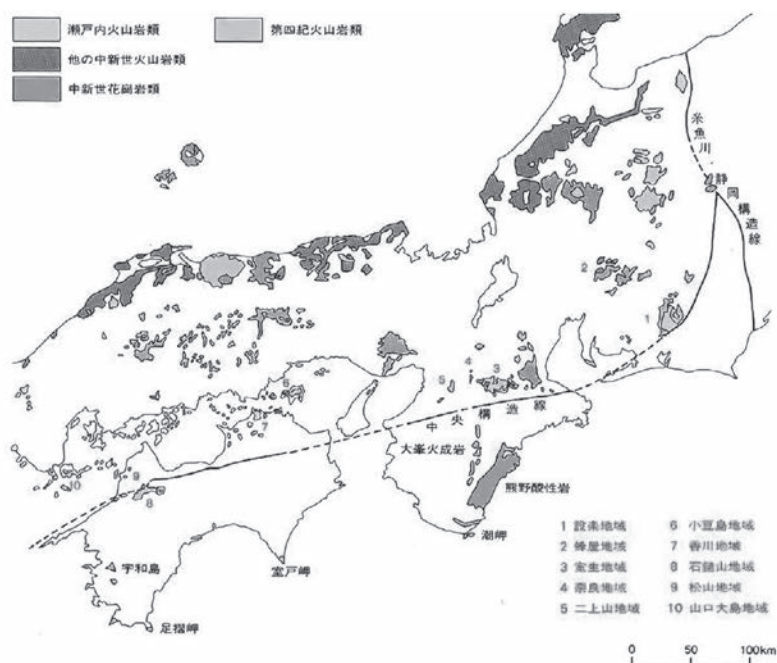
3. 地質学岩石学の讃岐石：サヌカイトと瀬戸内火山岩区

現在の岩石学分類では、火成岩はその科学的組成によって区別される。日本の岩石学初期には個別命名されていて、和名岩石学名「富士石」とも呼ばれた「安山岩」は、その学術名称が「アンデス山脈の火山岩（Andesite）」であることから、アンデス山脈を「安山」に置き換えて「安山岩」となっている。火成岩で SiO_2 が53-63%のものを安山岩、それ以上70%までをデイサイト（石英安山岩）とし、成分的には深成岩の閃緑岩と花崗閃緑岩に対応する。酸化マグネシウム（マグネシア MgO ）が豊富なものは高マグネシアとして区別し、瀬戸内火山岩区に特徴的なものとされている。なお、現在の地質学岩石学では、地名を冠した命名は推奨されず（巽 2003）、岩石名称の増加が回避されたが、成分比で区別できる標識サンプルが採取された場所を冠した岩石名も継続して使用されている。

サヌカイト（Sanukite：讃岐石）は、新第三紀後半の岩石学的高マグネシア安山岩（デイサイト含む）の中で、ガラス質石基（ガラス質）、斑晶に乏しく黒く緻密なものを呼称する。マグネシウムに富む橄欖石、斜方輝石などのわずかに含まれる斑晶は、高温の初生安山岩質マグマ（深さ30~50kmのマントルで生じた未分化マグマ）が急激な噴出により急冷されて晶出したものとされる。讃岐の第三紀火山活動で特徴的な産出をしたことから「讃岐石」と命名されたが、類似の特徴を持つ安山岩（デイサイト含む）は、中央構造線北側に沿って瀬戸内火山岩区を含む内帯に、近畿地方から九州まで広域に分布する。

一方、マグネシウム比率が低い漆黒や暗灰色無斑晶のガラス質安山岩（デイサイト含む）は日本列島に広く認められている。今日、これを考古学的な研究のため、「瀬戸内火山岩区のサヌカイト」と「二上山産出」を区別して、後者を含めて「ガラス質安山岩」や「黒色緻密無斑晶安山岩」などとして取り上げることがあって（杉原・小林 2006）、「ガラス（玻璃）質」は、考古学的な区別で使用される岩石の特徴であることを注意しよう。

サヌカイト（Sanukite：讃岐石）は、明治期のお雇い外国人エドモンド・ナウマンが発見して



第4図 近畿・中国地方の第三紀第四紀火山岩分布
(沢井誠・佐藤隆春 1989より)

(Naumann 1885)、「カンカン石」という印象的な名称で紹介した。さらにドイツの岩石学者エルンスト・ヴァインシェンクが命名 (Weinschenk 1891) したもので、日本の地質学岩石学では1890年代後半あたりから同種岩石に Sanukite (サヌカイト)・讃岐石の名称が使われてきた。小藤文次郎東京帝国大学教授は、1916 (大正5) 年の英文論文で、その岩石学的成分組成を明示し、サヌカイトと類似石材をまとめてサヌカイト類 (サヌキトイド) とした (小藤 1916)。

近畿地方中央部では、現在、二上山や三笠山、甲山、生駒山 (宝山寺・石切) などで高マグネシアのガラス質安山岩 (サヌカイト・サヌキトイド)、二上山、畝傍山と耳成山、信貴山で流紋岩などの産出が知られている。これら火山岩産出地の多くは、地質調査所のナウマンが主導した日本全域地質図の作成作業として、1882 (明治15) 年から83年に東京帝国大学学生に課された踏査の結果把握された地点が多いと言われる (今井 1966)。「甲山」の地名は、ナウマンが1885 (明治18) 年の論文中に記載している (Naumann 1885)。生駒山は、ヴァインシェンクが1891 (明治24) 年に記載した。近畿地方中央部の主な火成岩産出地は輝石安山岩、英雲 (石英雲母) 安山岩、雲母安山岩に整理されて、地質調査所1892 (明治25) 年発行の20万分の一の地質図「大阪図幅」の説明書 (地質調査所 1893) で記載された。小藤文次郎は、1916 (大正5) 年の英文論文で、第三期の火山活動を取り上げた後、奈良県三笠山、耳成山、二上山、兵庫県甲山を分析している。

ナウマンは、1885 (明治18) 年論文で、ガラス質の「カンカン石」が瀬戸内にほぼ限られること、さらに同種岩石を「古銅輝石」の微斑晶が特徴的な黒色のものと、石基に微長石が特徴的な暗灰色のもの、二つのカテゴリーがあることも把握していた。二上山とともに兵庫県西宮市甲山を前者に含めて記述しているのは注意したい。現在の知見に合わせると、サヌカイト類 (サヌキ

トイド)の中にサヌカイトとそれに類似する特徴を備える安山岩の違いがあることに呼応するだろう。

いくつかの地名が、ナウマンのいう「カンカン石」に含まれているので、ナウマンは、今より広く同種石材を認定したことがわかる。ナウマンとヴァインシェンクの「カンカン石」の分布範囲と、現在の先史時代考古学での「サヌカイト」石材産出地の識別範囲の間に、すでに乖離があることを指摘しておきたい。

4. 二子山、二子石をめぐる

東京帝国大学出身の大湯正雄は、1891(明治24)年の濃尾地震を受けて設けられた震災豫防調査会の調査として、1910(明治43)年に「二上火山調査報告」(大湯 1910)を発表した。二上山周辺の火山構造をまとめて明らかにした初めての論考であろう。大湯正雄は、のちに東北帝国大学教授を務めたが、1921(大正10)年40歳で夭折した。

大湯正雄の二上山調査の詳細を紹介する紙幅はないので、筆者が注目する部分を述べる。報告の第1編「地貌論」第1章「山系論山系詳論」に「二上火山」が解説され、「一名二子山ト称シテ此等火山(郡)中最大最高ノ圓錐状火山ナリ 其外形亦美麗ニシテ箱根火山群ノ秀峰タル二子山ニ髣髴タリ・・・」と記す(第6図)。二上山が箱根二子山に似ていると記述があって、さらに、



第5図 二上火山地質図(大湯 1910)

第一編 地貌論

第一章 山系論

山系概論

調査區域ハ大和河内兩國ノ境ヲナシ南北ニ走レル葛城山系北端ノ一火山地方ニシテ地形又單調タルヲ免レズ區域ノ北境ハ大和川ノ溪谷ヲ隔テ、遙カニ生駒山ニ對シ而シテ南境ハ自ラ二上山ニヨリテ限ラル然リ而シテ東西兩側ニ至リテハ徐ロニ大和河内兩平野ニ連ルヲ見ルベシ。

區域一般ノ地勢タルヤ葛城山系トハ其ノ間自ラ趣ノ大ニ異ナル處アリト雖ドモ兩者ノ間其高底ニ於テ特別ノ差異ナキガ爲メカ時ニ人ヲシテ葛城山系ノ一部分ト誤ラシムルコト無キニシモアラズ山系ハ總ジテ火山ニ特有ナル圓錐形ヲ呈シ地形學上又幼年ヨリ壯年ノ時代ニ進行シツ、アルモノナレバ今ヤ老年ニ近キツ、アル葛城山脈トハ溪谷其他ノ有様ニ於テ異ナル處少ナシトセズ。

山系詳論

區域ニ對スル委細ノ地貌ヲ知ラント欲セバ先ヅ足ヲ二上山ノ山頂ニ運ブベシ。

(1) 中央區域 區域ノ中央ニ位シテ關谷ノ盆地アリ此ノ盆地ハ

東ハ關谷村ヨリ西ハ田尻村ニ至リ全形隋圓形ヲナシ第四期時代湖水堆積層ヲ以テ充タサレタル一ノ化石湖タリ而シテ其ノ一部ノ遺物ハ今モ尙ホ盆地ノ東北隅ニ在リ關谷湖ト稱セラル此ノ盆地タルヤ實ニ一小化石湖タリト雖ドモ我區域ニ於テハ地形學上重要視セラルベキモノナリ何トナレバ我が全區域ハ此ノ盆地ニ依リ南部及北部ノ二ツニ分タルベシ之レ只低地アルガ爲メ便利上區分セシニ非ズ地形學上既ニ業ニ兩者全ク其ノ趣ヲ異ニスル處アレバナリ。

(2) 北部地方 此區ハ全體トシテ一ツノ臺地的丘陵地ナリ全部讃岐岩ヨリ成ル而シテ臺地ノ北側ハ急ナル傾斜ヲ以テ大和川ニ臨メドモ南側ハ徐ロニ關谷盆地ニ向ツテ傾ケリ臺地全體ノ走向ハ南西ヨリ東北ニ伸長ス。

(3) 南部地方 北部ハ斯カル臺地的地勢ヲ呈スルニ係ハラズ關谷盆地南部地方ハ純然タル火山群地方ナリ略ボ南東ヨリ北西ニ伸長セル線上ニ群出セル圓錐狀火山ニテ充タサルト云フモ過言ニアラザルベシニ上山、大師山、春日山、等ハ其ノ重ナルモノナリ以下順次彼等ノ形態ニ就キ其概略ヲ說カン。

二上火山 一名二子山ト稱シテ此等火山郡中最高ノ圓錐狀火山ナリ 其外形亦美麗ニシテ箱根火山群ノ秀峰タル二子山ニ彷彿タリ 海拔五百七十五メートルヲ算ス、山頂ハ其名

岩ナリ、勿論今日野外ニ於テ見ラル、イ層ノ境界線ハ當時ノ大河運河即チ葛城山脈ヲ横斷セル所謂大和川陷落地ノ海岸線ヲ其ノ儘代表セルモノニアラズシテ當時ノ境界線ハ恐ラク尙ホ南方ニ進ミ居リタルナルベシ、斯クノ如クイ層ハ沈澱セラハ、間ニ同噴火口ヨリ第二ノ熔岩ノ噴出ヲ來セリ即チ我が區域ニ於テ尤モ興味アル含栢榴石雲母富士岩ノ流出之レナリ、而シテ略北方ニ向ヒ殊ニ少シク北西ニ偏シ直接松香石熔岩流ノ上ヲ流下セシガ如シ、其ノ後「ドンズリボー」ノ層ハ漸々形成セラレツ、アリシ間モナク更ニ第三ノ噴出ヲ初メタリ、此ノ熔岩ハ即チ現今斜方輝石富士岩トシテ二子山ノ北方即チ穴虫村ノ南方ニ尤モ能ク發展セル處ノモノニシテ流出方向ハ從前ヨリ少シク北東ニ偏シタルガ如シ。

此ノ第三回ノ噴出ニ依リテ二子火山ノ山體ハ略形成サレ而シテ「ドンズリボー」層ノ最上層ハ既ニ此ノ時漸次又沈澱サレツ、アリシナラン。

然ラバ斯クノ如ク一方ニハ二子火山ハ大略山體ヲ形成シ了リ而シテ「ドンズリボー」層ハ又大和陷落地即チ大和運河ニ形成セラレツ、アリシトキニ近傍ノ地形ハ如何ナル變遷ヲ來セシヤ少シク關連シテ考察スルノ必要アルベシ。

大和湖及ビ河内海ヲ當時連結セル唯一ノ通路タル此ノ大和運

河ハ二上火山ノ發達ト共ニ南方ハ漸次峽メラレタリト雖ドモ尙ホ當時原形ヲ存セシナリ而シテ當時ノ形勢ヲ案ズルニ葛城山系ヲ隔テ、東方ニハ大和湖アリ河内海ハ僅カニ葛城山系ヲ横斷セル大和運河ニヨリテ之レト通ズルアリ又運河ノ南側ニハ二子火山漸次其ノ高サヲ増加シ「ドンズリボー」層ハ又其ノ北麓ニ弓狀ヲナシテ徐カニ沈澱シツ、アリシナラン。

然ルニ茲ニ第四回ノ大ナル噴出ノ爲メニ著シキ變化ヲ地形上ニ來セリ之レ即チ讃岐熔岩流ノ噴出ナリ、之レハ獨リ二上火山ニ於ケル最後ノ熔岩流タルニ止マラズ尙ホ大ナル規模ヲ以テ陷落地ノ其處此處ニ噴出セリ、或ハ圓錐狀ノ火山塊ヲ作り又ハ廣ク流レテ臺地（讃岐岩ハ多ク臺地ヲ作レ）ヲ作ル等實ニ壯快ナル光景ヲ演ゼシナリ今之レガ狀況ヲ各部分ニ就キテ記述セン。

陷落地域ノ南部ニ於テハ二上火山最後ノ熔岩トシテ現ハレ出デリ而シテ此ノ時ニ於テハ二ツノ噴火管ヨリ流出ヲ初メ尙ホ其ノ管ノ頭部ヲ塞キ現今見ル處ノ雄雌兩峯ヲ形成セリ、同時ニ北麓ニ於テハ二三ノ寄生火山錐ヲ作り又ハ岩脈トナリテ竹内峠近傍又ハ穴虫村ノ南部ニ現ハレ次デハ二上山近傍北方ニ當リ春日山大師山等ノ塊狀火山ノ噴出トナリ尙進ンデハ陷落地ノ北境弱線ニ沿ヒ南西ヨリ東北ノ方向ニ列ベル數多ノ噴火口ヨリ大ナル流出ヲ初メ茲ニ讃岐岩ノ臺地ハ作ラレタリ。

神山石

は最後の噴出物にして神山噴火口邊に最能く流出せし故に神山石と名げたり、岩色濃黒にして磁鐵鑛に富み輝石斑狀をなし、輝石は許多集合して恰も薩摩がすりの斑點の如く且つ多少黃色を帶ぶ、黃色は輝石の割裂したる處に發するものにて金屬の色に類す、此中には大なる斜方輝石もありて甚多色性なり、即ち帶赤褐色より淡綠色若くは綠色に變ず、橄欖石は小なる粒形をなし甚多からず、而して斜方輝石と橄欖石は甚相似たれども、一は常に結晶をなし、一は小粒をなし、且つ一は帶色あれども一は殆ど無色に見ゆ、長石は最も鹽基性にして、ピトリナイト乃至アノルサイトあり、石基は微晶質にして玻璃亦あり、此石は最近の噴出なれば神山駒ヶ岳より流出して上部を覆蔽し、重に靛湖の方に向て流出し、臺ヶ岳に於ては堅緻なる岩石をなせども、全体には多孔質にして粗造あり、元箱根姥子間の通路に低岡起伏するは皆此熔岩流の末端にして、多く多角形狀に割裂す、

二子石

は神山石の前に噴出したるものにて、二子山に最能く露はるゝ故に名く、岩色淡灰色、若くは暗灰色にして輝石斑狀をなし、全体に神山石と同様あれども其色の淡なる、文酸性多からん、二子山は此石を噴出したる後に火口熄みたるものと見へ最上部に此石あれども、神山駒ヶ岳に於ては神山石の噴出の爲め蔽はれて、大地獄、小地獄、早雲地獄等水蒸氣の爲めに噴裂したる場處に於て、神山石の下部に露出するを見る、

要害石

は二子石の前に噴出したるものにして舊火口の最後の噴出物なり、神山駒ヶ岳、二

報告中よく同節同文中に二上山と二子山、二上火山と二子（山）火山が散見される（第7図）。

この交錯については、一見校正不足とも見えるが、大湯正雄は「二上山」と古名の「二子山」両方の地名を現地に即して使い分けた可能性があつて、「二上」は春日山や古市山、明神山などを含む火山群広域、「二子」は雄岳雌岳周辺を指すようにも見える。河内名所図會では、雄岳（嶽）雌岳（嶽）をあわせて「二上嶽」とする表記となっているので、大湯正雄の表記の根拠は不明である。岩石名は「二子石」や「Futagonite」ではなく、安山岩一般が「富士岩」、「二上山産サヌカイト」は「讃岐石」「讃岐溶岩」となっている。

実は、「二子山」「二子石」の名称は、石井八萬次郎が1894（明治27）年に「箱根火山研究録」（石井1894）の論考で、箱根火山のカルデラ内の南東側に位置する二子山火山および溶岩、火山岩として、すでに使用されている（第8図）。二子山は、約5,000年前の噴火で形成された溶岩ドームで、箱根駒ヶ岳、神山、台ヶ岳などとともに中央火口丘を構成する。その名のとおり、双生児のように二つの峰が並んでおり、北側が上二子山1,099m、南側が下二子山1,065mである。

石井八萬次郎の箱根二子山の学会報告が1894年、大湯正雄の二上山の報告は1910年であるので、地名としての「二子山」は除くとしても、火山や火山岩の学術的命名のプライオリティは、16年も前の石井八萬次郎の箱根火山研究録にあるだろう。この先行研究を大湯正雄も承知していたので、わざわざ二上火山の最高峰である雄岳雌岳の二峰が箱根二子山に似ていると記し、地名にちなんだ岩石名を命名せず当時の一般的学術名称である「讃岐石」の名称を使つたのだろう。

結局、二上山の火山名および二上山産ガラス質安山岩（サヌカイト）の学術名として、「二子（山）火山」「二子石（岩）」の名称を提起することは重複となつて、地質学岩石学分野での学術的命名は不可であつたし、また実際の提起があつた証拠も見つからない。

箱根と区別できるよう配慮して、大和や河内などを冠して「大和二子火山」「河内二子石」を地質学岩石学的に定義する論文も、書かれることはなかった。二上山の名称には「にじょうざん」「ふたがみやま」「ふたかみやま」の呼び分けがあることから、「Nijyonite」「Futaga(n)ito」「Futakamite」なども岩石名に使えるそうだが、見当たらない。小藤文次郎東京帝国大学教授は、1916年の英文論文で二上山の読み方として「Futakami-yama」「Nijo-san」を挙げている。

以上管見では、小川京都帝国大学教授が濱田教授に伝えた、二上山の別名である「二子山より出るを以て二子石（Futagonite）と命名せる学者」の存在は発見できなかった。ひょっとすると、石井八萬次郎の箱根二子山火山岩が「二子石」と命名されていることと、大湯正雄が煩雑に記載した二上山の別名が二子山であることを、京都帝国大学の小川教授が混同し、二上山のサヌカイトが「二子石」とであると、濱田教授に錯誤して伝えたとも想像できるだろう。この時期の地質学岩石学が「富士岩」「讃岐石」「二子石」といった採取地個別命名単一表記がまだ主流であつたので、産出地名を取り違え、さらに一般岩石名も省略して伝えたことにより、学際情報の考古学への取り込みミスが生じた事件であつたと推理できる。

5. 「二子山文化」と末永雅雄の「二上山文化」

濱田教授の京都帝国大学考古学教室周辺では、国府遺跡発掘以後、二上山のガラス（玻璃）質

安山岩：サヌカイトに「二子石」の名称が採用されたようで、京都帝国大学の島田貞彦と末永雅雄は1926（大正15）年日下貝塚を発掘し、出土の玻璃質安山岩製石器が、近傍の二子山（二上山）から供給された石材であることを、「所謂「二子石」と通称さるゝものである」と記述している（島田 1926）。一方、梅原末治助手が1923（大正12）年、「再び大和唐古の遺跡に就いて」で「サヌカイト」と記載している（梅原 1923）ことは、興味深い。

一方、京都帝国大学の濱田門下とは異なり、周辺の研究者は「二子石（岩）」の岩石名を使用しない。目に触れた範囲では、東京帝国大学卒業の笠井新也は、池田師範学校在職中の1915（大正4）年に兵庫県川西市加茂遺跡を発見し、遺跡に「サヌカイト」破片が散布すると報告する（笠井 1915）。樋口清之は、1926（大正15）年の論文で奈良県山辺郡二階堂村岩屋の磨製石鏃が「サヌカイト」とであると記述（樋口 1926）し、さらに1931（昭和6）年の「大和二上石器製造遺蹟研究」では、二上山北麓には「Sanukite」の原石産地があること、その周辺の「Sanukite」石器の製造遺跡を取り上げ、石器生産工程、石器時代の遺跡分布や交流や交易まで幅広い検討を行っている（樋口 1931）。

濱田教授が昭和5年に本山への祝辞や講演で述べた後、「二上山産出サヌカイト」を指しての「二子石（岩）」や「フタゴナイト」、さらに「二子山文化」は、見当たらなくなる。この頃に、地質学岩石学では「二子石（Futagonite）」が「二上山産出サヌカイト」の岩石名称ではないことが判明し、濱田教授とその周辺が、関連学問の根拠を失った考古学用語として積極的な使用を見合わせるようになったかと推測する。

京都帝国大学考古学教室周辺では、1935（昭和10）年の梅原末治1935「京都白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第16冊』では「サヌカイト」となっている。

末永雅雄は奈良県史蹟名勝天然記念物調査会で濱田教授の指導を仰ぎつつ、1930（昭和5）年から1938（昭和13）年まで奈良県宮瀧遺跡を発掘した（末永 1944）。この調査で末永雅雄は、「今次の調査の特殊研究として……石質から交易関係を知ろうと試み」、自身の研究の根拠を専門研究者の成果に依拠する。地質学岩石学の専門家である京都帝国大学助教授上治寅次郎に、1936（昭和11）年の宮瀧遺跡現地での地質と地形形成調査、さらに石器類岩質の顕微鏡検査を委嘱し、その報文を収録している。上治助教授の報文（上治 1944）では、宮瀧遺跡の地質学的環境、地形形成などの検討に続いて、地質学岩石学者が採取した溶岩や岩石ではなく、考古学資料である石器の石材を、石基斑晶の違いによる火山岩産地比較を顕微鏡で行って、考古学的な意味での石材の由来を解明しようとした。報告書に遺跡研究のため執筆を依頼した関連科学の論考を、そのまま収録することは、実は濱田教授の轍を踏まぬ工夫ともなっている。

岩石学的検討の結果、石鏃・皮剥、球形石、石斧、石槍、石錐其他雑石等が、「二上火山産の讃岐岩質溶岩」とであるとされた。単に「讃岐岩（石）」ではなく、「二上火山産の讃岐岩質溶岩」＝二上山産出＋讃岐岩（と同）質溶岩＝産地名＋ガラス（玻璃質）安山岩の記述となっているのは注目したい。岩石学の立場での上治の記述式は、国府遺跡発掘調査報告の註（4）にある濱田教授の岩石二命名法と同様の記述であり、岩石学での記述と考古学での記述を整合させるという成果を生み出している。これを受けた考古学的報告で末永雅雄は、二上山産出であることを明記しつつ、濱田教授の提案する「玻璃質安山岩」ではなく、慎重に考古学的岩石名として定着した「サ

ヌカイト」を使用する。

濱田教授が『通論考古学』で「もとより一人にして各種の学科に深き造詣あること難きを以て、その特殊の研究は各専門家に委託するのほかなしといえども、ある程度までの知識とこれに対する興味とを挟有することを要す」（濱田 1922第1編第3章11「各学科との関係」部分）と記したことを踏まえ、末永雅雄が自然科学分野と考古学の連携を模索し、上治へその意図を正確に伝えた成果であると思われる。「二上山サヌカイト」と「二子石」「Futagonite」をめぐる混乱を、濱田教授の考古学的二命名方法に回帰して、末永雅雄が収束させたと思っていいだろうか。

この経緯の中で、濱田教授の「玻璃質安山岩」も、一時忘却されたことは注意したい。

1936・37（昭和11・12）年、末永雅雄を担当者にして、京都帝国大学考古学教室の小林行雄助手、藤岡謙二郎副手らが参加して、大和唐古遺跡の発掘が行われ、国府遺跡と同じ大和の弥生時代遺跡の内容が解明された。その報告『大和唐古彌生式遺跡の研究』（末永・小林・藤岡 1943）では、石器石材の鑑定等は、中村新太郎京都帝国大学名誉教授の教示を仰いだ。藤岡副手と小林助手により石器について精緻な実測図と写真の掲載、記述、考察が加えられた。「石器の用石」の項で唐古遺跡の石器生産と石材供給の問題が考察されている。打製石器の「用石」は「二上山讃岐石」に限られていて近畿地方各地の弥生時代遺跡に共通すること、石器生産は二上山原石産出地ではなく唐古遺跡で行われていること、唐古遺跡の石器生産で「舊石器類似石器」が「偶然的現象」で生産されたとしたこと、畿内弥生時代石器生産では、東北地方や北海道の縄文時代遺跡と異なり「特殊な打製石器の発達」はなかったこと、反面大量の打製石器が生産されていることは「金属製利器の貧困」を示すであろうこと、後期には石器が消失することなどが考察されている。石器の分析は、藤岡副手の原稿を小林助手が大幅に加筆したものといわれる（穴沢 1994 p187）。

1937（昭和12）年、濱田教授は京都帝国大学総長に就任するが、1938（昭和13）年7月25日に急逝した。

末永雅雄は、濱田教授の逝去後も、1938（昭和13）年から橿原遺跡の調査を行い、自ら設けた橿原考古学研究所で研究と報告書の刊行を続け、1952（昭和27）年に関西大学教授に就任した。宮瀧遺跡、唐古遺跡、橿原遺跡の調査は、大和の縄文時代から弥生時代への石器文化の変遷を明らかにしていく過程であり、故濱田教授の「二子山文化」解明への道標でもあったろう。

末永雅雄橿原考古学研究所所長は、1956（昭和31）年、「二上山文化総合調査」（橿原考古学研究所 1957）を開始した。その中間報告の冒頭で「この二上山が近畿古文化を象徴する諸条件をもっていると云うことは、・・・かつて京都大学の考古学教授であられた浜田青陵先生が、大正の初期にすでに着眼されていたのである・・・」として、濱田教授の二上山をめぐる研究に言及している。1930（昭和5）年の本山邸での展観に同席していたことから、末永研究所長の「二上山文化」は濱田教授の「二子山文化」と同じであると読める。国府遺跡と二上山の「フタゴナイト」原石産出地の関係が旧石器在否問題もあわせた石器時代研究の鍵と考え、研究の継承を計画したことになる。

人文科学の先史・古墳の考古学2班、歴史学、文学、民俗、地理、石造美術、建築の計8班、自然科学の人類学、植物、動物、地質の4班が構成され、50名近い研究者で「二上山文化総合調査」が行われた。

末永所長の調査の主眼が、所長退任後の1987年、奈良県立橿原考古学研究所の彙報「青陵」に、後進への研究報告刊行への叱咤とともに記されている（末永 1987）。

- 「一 この遺跡でサヌカイトを主とする石材の採取は石器時代のどの時期に上限を置くべきか。あるいは旧石器時代まで遡りうるかどうか。
- 二 石材の採取は各人各個が自由に採取したか。当初はそうであっても後に地元住民に鉱区権のようなもの、あるいは慣習的なものが現れたか。現代の金剛砂採掘のような手続き（があったかどうか）」

を解明することであった。まさに濱田教授の1930（昭和5）年の講演「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」の一節である。1950年代には「サヌカイト」の石材名称が定着していたので、先史班は、研究課題として「二上山を中心とした無土器文化」「二上山産出サヌカイトの分布」「屯鶴峯附近の遺跡の調査」、地質班は「サヌカイト及び凝灰岩の科学的研究」が設定された。二上山周辺の「サヌカイト」散布地の踏査、河南町飛鳥の「サヌカイト」産出地の調査、さらに濱田教授が大正時代に調査した河内国府遺跡の再発掘調査が1957（昭和32）年3月に行われている。

末永所長は、濱田教授の「二子石」の膠着を解きほぐした後、二上山総合調査で「二子山文化」の提唱を「二上山文化」として再構築しようとしたようだ。末永雅雄の宮瀧遺跡発掘から二上山総合調査まで、その調査研究の基調には、濱田考古学の学理と学問的構想が潜在通底しているように感じられる。

末永所長は、戦前から欧州旧石器の研究で知られる大山柏公爵と親交があって、積極的な論考



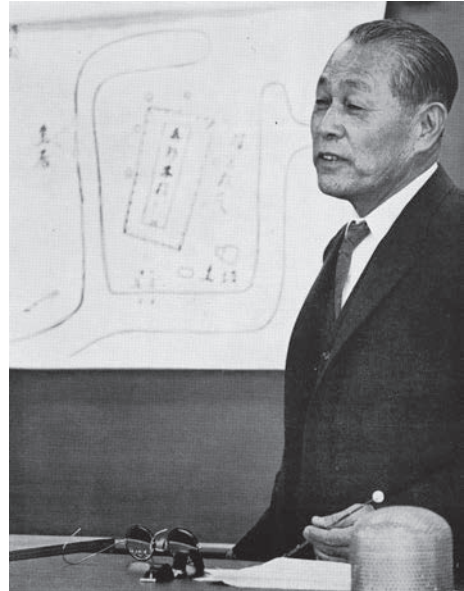
第9図 二上山文化総合調査記録 文書箱「二上山」の一部

を発表したことはないが、日本の旧石器在否問題に関心があったことは間違いない。末永所長は、濱田教授の国府遺跡の大形粗石器（濱田 1918第四章第一節）に一見見間違いそうな「サヌカイト」製「大形打製石器」を二つ、二上山総合調査に先立つ1955（昭和30）年の秋、「二上山西麓近鉄電車大阪線関屋駅西南方石屑堆積地帯」で採集（山口 2018）していたが、この石器を「二上山文化総合調査」の研究には供せず、未報告のまま手元に残していた。

畿内弥生時代の石材供給を受ける側の遺跡から発見される「大形粗石器」「舊石器類似石器」に対して、戦前に濱田教授の国府遺跡調査の積極的証拠はなく今後の課題という見解（濱田 1918 p 34）、藤岡副手と小林助手の唐古遺跡の弥生時代石器生産の「偶然の現象」という見解（末永・小林・藤岡 1943 p 205）が出されていた。第二次世界大戦が敗戦で終結して、考古学にも新しい息吹がもたらされたが、1946（昭和21）年の群馬県岩宿遺跡旧石器発見を受けても、どの研究者もこれを再検討しなかった。一方、末永所長はこれに納得しておらず、原石産出地上の石器生産遺跡から発見される同種石器についての研究は必要と考えたのだろう。採取した石器が未報告のまま手元に残っていたのは、「二上山文化総合調査」が思うように進展せず、慎重を期した結果、発表の機を逃してしまったからではなかろうか。

末永所長の1955（昭和30）年の石器の採集が、濱田教授の国府遺跡と二上山原石産出地との連関を呼び覚まし、奈良県宮瀧遺跡、唐古遺跡、橿原遺跡の調査によって積み重ねられた石器石材の知見と結びつき、「二上山文化」の総合調査の一つの動機になったと思われる。二上山文化総合調査開始時の雰囲気は、末永所長の文書箱「二上山」に保存されていた新聞切り抜き（第8図）から窺えるだろう。国府遺跡の「大形粗石器」を問題とした濱田教授の長年の課題を自ら解明しようと、末永所長は、ひょっとしてかなりの期待を抱きながら、再び原石産出地から検討しようとしたのだろうか。

本山彦一の「本山考古室」に収蔵展示された考古資料は、本山大毎発掘隊の国府遺跡を含めて『本山考古室要録』（末永 1935）で目録になり、関西大学教授でもあった末永雅雄の尽力で、関西



第10図 末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所
所長・関西大学名誉教授



第11図 二上山西麓の大形打製石器

大学博物館蔵「本山コレクション」となっている（関西大学博物館 2011）。末永名誉教授は、この本山コレクション中の本山発掘国府遺跡資料に、多数の「サヌカイト」製石器があることから、「国府遺跡調査の当時旧石器問題があったので再検討してみてもどうか」（末永 1986 p 74）と、本山コレクション国府遺跡資料（山口 1981）から旧石器在否問題を研究するよう関西大学文学部考古学研究室に促したことがある。二上山の原石産出地だけではなく、国府遺跡もあわせて旧石器在否は、末永雅雄にとって生涯の未解決課題の一つであったと思われる。

末永雅雄1957「(32) 二上山文化総合調査」『二上山文化総合調査』部分

大和と河内の境にあってどちら側から見ても姿のやさしい二上山は、とくに大和の飛鳥地方から眺めると夕陽を背景に、くっきりと浮き出たその山容の美しさは、万葉歌人のもつた憧れを思わせる。これを河内側から見ても雄嶽、雌嶽の均整のとれた姿もまた特別な趣きを見せている。同じ連峯中の金剛山が厳しさをもつて抜き出ているのとはよい対照である。

この二上山が近畿古文化を象徴する諸条件をもっていると言うことは、これをいろいろの視角から検討しなければならない時期がいつか来るだろうと期待していた。考古学者としては、かつて京都大学の考古学教授であられた浜田青陵先生が、大正の初期にすでに着眼されていたのであるが、その後多くの研究者の注目を浴びながら総合的な調査の実現には至らなかった。

< 中略 >

一例を挙げると、わが原始時代の人たちの生活に何よりも大切な道具であった、石器の素材たるサヌカイトの主な原産地として知られており、サヌカイトでつくった石器は長い年代に亘って使われていた。恐らく近畿地方の原始文化の発展に最初の貢献をしたものの一つとして、この二上山のサヌカイトが挙げられよう。そしてその初まりは数千年の昔にあるのではなからうか。また古墳時代の石棺や飛鳥時代以来の寺院建築の基壇や、礎石をつくった凝灰岩もこの山から供給され、金剛砂の採掘も行われてきた。

原始時代の生産基地としてこの山の働きは、いろいろな文化を育成する条件をもつこととなって、やがては奈良を育て、大阪を発展せしめたのではなかった（か）とさえ考えられる。

かかる見地に立って我々は堅実にこの研究を進めてゆきたいと思っている。

昭和三十二年三月

末永雅雄

6. 二上山とサヌカイト、ガラス（玻璃）質安山岩

熊本県合志市の二子山石器製作遺跡（熊本県 1979）が、1982（昭和57）年に国指定史跡となった。縄文時代後期から晩期にかけての打製石斧製作として著名な遺跡である。熊本県合志市二子山には玄武岩質安山岩の露頭が多く発見され、その周辺には剥離された石材・剥片・未成品・敲石等が多量に発見されている。この打製石斧の分布は、南は白川から北は菊地川までの地域に、現在約60か所の遺跡が確認されているという。

地質学岩石学での箱根「二子石（岩）」の名称は、この領域での岩石命名方法が変更になって「旧名称」になった。さらに、考古学の学門的領域で、「二子山」を産出地とする玄武岩質安山岩製石器生産遺跡が知られたことから、今や考古学での通称岩石名にすぎないであろうが、1918（大

正7)年に回帰して、「二上山産出サヌカイト」の名称として「二子石」「Futagonite」を復活させることに慎重となるだろう。

一方、「二上山産出ガラス質安山岩」を「讃岐の石」の意味である「サヌカイト」と呼称することにも、一抹の居心地の悪さを感じないだろうか。直近の近畿地方中央部でも ナウマンが言及した二上山以外の地点で産出するガラス質安山岩を使用する旧石器時代や弥生時代石器群が最近発見され、既知資料も再検討されつつある。また、瀬戸内火山岩区以外の火成岩も近畿地方に産することも無視できない。山陰の第四紀火山群や新第三紀グリーンタフ造山運動に連動した北但層群火山活動は、優良な石器石材を供給した可能性があつて、現在探査を続けている(山口 2001・2021)。広く日本列島全体でも、「ガラス質安山岩」として多くの原石産地が把握されている(白石・藁科 2002、杉原・小林 2006)。今後近畿圏で産出地の検討を経ないものも一括して「サヌカイト」表記を続けるなら、研究上の混乱が拡大するだろうと思われる。汎日本的に研究視野が拡大した今日、瀬戸内火山岩区に制約される名称である「サヌカイト」を、このような近畿圏石器時代研究で使い続けることには限界があると感じる。

近畿地方の瀬戸内火山岩区における二上山産を主とする「サヌカイト類」については、従前の「讃岐」という地名概念を含む「サヌカイト」呼称を(二上山産出以外の識別されていない原石産出地由来のものが混在している可能性を内包していることを意識しながら)継続するか、既知の「二上山」や、「甲山」「生駒」「三笠山」など今後考古学的に石材開発が発見された時の対応を見越して「個別産出地」+「サヌカイト」という地名概念重複の不自然を残して呼称するか、個別産出地名を、濱田教授の採用した一般的な岩石名称「玻璃質安山岩」または今日的にアップデートされた「ガラス質安山岩」と産出地名を組み合わせた二命名法で意図的に呼称するか、近畿地方の石器時代考古学研究者は選択しないといけないだろう。讃岐地方の「サヌカイト」も、五色台や城山、金山など噴出源によってわずかに成分が異なることも知られていて、こちらも学理的に岩石名命に問題を内包している。

日本の初期地質学岩石学では、火成岩産出地で発見された岩石にまず「採取地」(種)が付されて、その岩石の観察分析の結果「一般名称」(属)が位置づける手順が踏まれていた。日本列島の地質構造を解明するために種は属にまとめる学理があつて、産出地での命名が煩雑となった時、次第に属名が優占するようになった経緯がある。一方、考古学の岩石は、「石器石材鑑定」を地質学岩石学の成果に依拠依存し、「サヌカイト」という考古学的岩石名は、それが導入された当時の岩石学理解を引きずっていて、「瀬戸内火山岩区」や「高マグネシア」などの理解の中で、やや拡散した考古学的岩石名となる可能性があることは忘れてはいけない。

考古学では、石材の検討は、考古学側が自ら行うか自然科学側に依頼するかは問わず、遺跡から発見された個別の遺物石材を観察分析し、「一般名称」(属)を判定、そのあと周辺の火成岩産出地(種)を相当させて判定する岩石学と逆手順を踏むものでなければ、新たな石材産出地を見逃すだろう。個々の遺跡の石材供給を検討する際には、周辺石材環境理解も考古学的な検討課題である。自然科学分野との連携では、「サヌカイト」石材の微量元素からの産地分析の可能性(藁科哲男・東村武信 1983、杉原重夫・小林三郎 2006)があつたとしても、比較検体が提供されなければ無意味な分析となる。考古学の側から、遺跡周辺で産出候補地の積極的な追加発見の努力と、より多元的な分析依頼を行うことが必要(山口 2001)であるし、初手から先入観を持って

「良質と考えられる産地」「あまり良質と考えられない産地」を区別することも危険である。

石器時代研究者は、近畿地方においては、「サヌカイト」が支配的石材であって、見かけ上同種石材であれば、すべて「サヌカイト」として一括してしまい、それ以上吟味しないし比較産地候補も採さないという盲点になっていたのではないだろうか。筆者も近畿地方をフィールドとする石器時代研究者として、多様な同属石材環境の分析経験に乏しいことを自覚する。いきなり地質学岩石学の既知「産地」を引き当てて判断するのは、「依存的」「経験主義的」とであると反省したい。

近畿地方の「サヌカイト」呼称は、考古学学史的に強い慣性を持った用語であることは理解しつつ、1918（大正7）年に濱田教授の提案した「玻璃質安山岩」、またはアップデートした「ガラス質安山岩」の石器石材岩石名の使い方を再検討したいと思う。その中で、石器時代古民族学的石器石材移動と石器生産の動態が鮮明にできるのではなかろうか。

7. おわりに

最後に、近畿地方を主なフィールドとしてきた旧石器時代研究者である筆者の私的な回顧を記したい。

普段、末永先生は「二上山のサヌカイト」と表現されていたが、1986（昭和61）年に「二上山岩」と記した（末永 1986 p 58）こともあった。その「二上山岩」が濱田教授の「二上山産出玻璃質安山岩」のことなのか、筆者には確かめられなかった。

また、末永先生が二上山西麓で採取された二つの「大形打製石器」は、そのころ「研究するように」と筆者に託されたものであった。末永先生の旧石器在否への関心に気がつかない筆者は、「大形粗石器」様の打製石器を長く手元に置かれていたと知ったことと、特段の指示がない「研究するように」という言葉に、戸惑いを覚えた記憶がある。この石器と関西大学博物館が所蔵する本山発掘隊の国府遺跡発掘石器を研究しろとの暗号に気付くこともできなかったことが悔やまれる。

本稿で、濱田教授が「二子山文化」を、末永先生が「二上山文化」を提唱されたいきさつを確認したことによって、「研究するよう」指示された筆者の今までの不明、至らなさを恥じている。

関西大学考古学研究室が日印共同学術調査インド共和国 UP 州シュラバースティー遺跡発掘調査を行っていた時、国内に残留した筆者は、大阪狭山にお住いの末永先生への連絡員を務めた。居間で緊張して畏まった筆者に、末永先生は「先学の業績を尊重するように」と諭された。宮瀧遺跡の石器生産技術と打製石斧の先端摩耗の関係について確かめに、（間違いなく筆者の勉強のために）宮瀧小学校の収蔵庫まで派遣されたことも懐かしい。

本稿をまとめるにあたり、二上山の「二上」「二子」地名呼称や由来について佐藤健太郎氏、斎藤安輝氏、岩下真央氏に、文献の渉猟について合田茂伸氏に、石器石材について山下大輔氏、渡邊貴亮氏に教示を頂いたことを記して感謝いたします。濱田耕作京都帝国大学教授の不朽の学理と視座、『通論考古学』、「二子石」と「玻璃質安山岩」、「二子山文化」と「二上山文化」、末永雅雄奈良県立橿原考古学研究所所長・関西大学名誉教授へのリレーに思いを馳せつつ、本稿の責は筆者にあることを明記して擲筆する。

*本稿中に収録の引用文献には、旧かな使いや旧字を改めたものがある。

【引用参考文献】

- 秋里籬 著・丹羽桃溪 画 1801『大坂名所図會』
- 穴沢 咏光 1994「小林行雄博士の軌跡」角田文衛編『考古学京都学派』
- 石井八萬次郎 1894「箱根火山研究録」『地質学雑誌』第1巻第7号-10号
- 今井 功 1966『黎明期の日本地質学』
- 梅原 末治 1923「再び大和唐古の遺跡に就いて」『人類学雑誌』第38巻第3号
- 大湯 正雄 1910「二上火山調査報告」『震災豫防調査會報告』第72号
- 笠井 新也 1915「玉類・斎瓮及び彌生式土器を混出する石器時代の遺跡（一）」『人類学雑誌』第30巻第11・12号
- 橿原考古学研究所 1957『二上山文化總合調査』
- 上治 寅次郎 1944「宮瀧遺跡の附近の地質調査並に出土石器の材料顕微鏡検査報文」『宮瀧の遺跡』
- 関西大学博物館 2011『本山コレクションの由来』
- 小藤 文次郎 (KOTO) 1916「ON THE VOLCANOES OF JAPAN」『地質学雑誌』第23巻279号
- 故本山社長伝記編集委員会 1937『松陰本山彦一翁』
- 熊本県教育委員会 1979『熊本県文化財調査報告38：生産遺跡基本調査報告書11』
- 沢井 誠・佐藤 隆春 1989「瀬戸内火山岩区——設楽と二上山を中心に——」『アーバンクボタ』28号
- 島田 貞彦 1926「河内國中河内郡日下発見の貝塚に就いて」『人類学雑誌』第41巻第12号
- 白石 純・藁科 哲男 2002「鳥取県東郷町麻畑の新発見安山岩産地について」『環瀬戸内海の考古学——平井勝氏追悼論文集——』
- 末永 雅雄・小林 行雄・藤岡 謙二郎 1943『大和唐古彌生式遺跡の研究』
- 末永 雅雄 1935『本山考古室要録』
- 末永 雅雄 1944『宮瀧の遺跡』
- 末永 雅雄 1986『常歩無限——関西大学考古学廿年の歩み——』
- 末永 雅雄 1987「二上山文化調査」『青陵』第64号
- 杉原 重夫・小林 三郎 2006「文化財の自然科学的分析による文化圏の研究——ガラス質安山岩産出地データベース——」『明治大学人文科学研究紀要』第59号
- 巽 好幸 2003『安山岩と大陸の起源 ローカルからグローバルへ』
- ナウマン 1885 (山下昇 訳)「日本群島の構造と起源について」『日本地質の探求：ナウマン論文集』1996 所収
- 地質調査所 1892『20万分一地質図大阪図幅』
- 地質調査所 1893『大阪圖幅地質説明書』
- 濱田 耕作 1900「南河内地方に於ける石器時代遺跡と古墳」『東京人類学会雑誌』第174号
- 濱田 耕作 1918『京都帝国大学文学部考古学研究報告第2冊 河内国府石器時代遺跡発掘報告』
- 濱田 耕作 1922『通論考古学』
- 濱田 耕作 1930「考古学上より見たる大和」『奈良文化論叢』第一編

- 樋口清之 1926「大和発見の特殊石包丁と石錐用石鏃について」『人類学雑誌』第41巻第10号
- 樋口清之 1931「大和二上山石器製造遺蹟研究」『上代文化』第4・5号
- 山崎直方 1889「河内国ニ石器時代ノ遺跡ヲ発見ス」『東京人類学会雑誌』第4巻第40号
- 山口卓也 1981「河内国府遺跡の旧石器」『阡陵』第4号
- 山口卓也 2001「サヌカイトの産地」『季刊考古学』第77号
- 山口卓也 2018「末永雅雄先生の二つの大形石器」『泉森皎先生喜寿記念論集』
- 山口卓也 2021「兵庫県北部における安山岩製旧石器の石材産地」『ひょうご考古』第18号
- 藁科哲男・東村武信 1983「石器石材の産地分析」『考古学と自然科学』
- Edmund Naumann 1885 Ueber den Bau und die Entstehung der japanischen Inseln. Begleitworte zu
den vor der geologischen Aufnahme von Japan den internationalen Geologen-Congress in Berlin
bearbeiteten topographischen und geologischen Karten
- Ernst Weinschenk 1891 Beiträge zur Petrographie Japans', Neues Jahrbuch für Mineralogie, Geologie
und Paläontologie, Beilageband 7